

都市研究センターの設立をめぐる

石塚 裕 道*

いま、40年に近かった都立大学での教員生活を回顧するとき、国公立諸大学のなかにおける本学（専任教員でなくても、しばらくそう表現することをお許し願いたい）の位置づけとともに、ここでの都市研究センターの発足とその役割を振り返ると、よくここまで発展したという思いが、ひとしきりである。

都立大学が誕生してからこれまで、繰り返して建学の理念やそのあり方、あるいは将来像などをめぐり、教員の間で多くの意見が交わされてきた。そして、東京都でただ一つの公立四年制大学としての特徴はなにか、さまざまな論議の過程で、各学部の所属学科のなかに都市研究の関連講座を少なからず含む本学にあって、一部の教員のなかから都市の学際的な共同研究の機運が生じてもふしぎではない。

こうして、いわば、教員が相互に情報を交換するなかで、やがて都市研究へ向けての研究会や組織づくりが始まった。だが、研究の環境についていえば、集まる会議室さえまして専任の研究員や職員なども望めず、研究費もゼロの状況から出発せざるを得なかった。関係者が研究への“情熱”だけでもちあわせてはいても、暗中模索の月日が数年、あるいは、それ以上も流れたであろうか。

それでも、ないないづくしの条件のもとで悪戦苦闘した記憶とともに、なつかしい情景が走馬燈のようによみがえる。

例えば、発足当初の学内都市研究組織であった「都市研究会」（最初から、そう呼ばれていたかどうか記憶にない）は古びて暗い目黒校舎の一角で、かつてストーブ燃料の貯蔵に使う石炭庫に当たる空間の一部を後に改造した経済学部S教授の研究室で開かれた。もう故人になられた都市研究の先輩の諸先生も含めて、そこでは熱い討議が繰りひろげられた。自からの専門分野ではあったが、研究蓄積の薄い日本近代都市史の領域で、どう対象に取り組んだらよいか攻めあぐねていた私にとって、都市行財政や建築史あるいは都市社会学・都市地理学その他の専門家から、数々の示唆を頂いた議論がありがたかった。

さらに、都市研究センター開設へ向けての動きのなかで、忘れられない思い出も少なくない。一部の教員有志のこうした研究組織が“研究所”などのかたちで、大学で公認されて制度化されるまでには、なお多くの困難の解決と長い道りを要した。要するに、関係者の願いが学内レベルで“認知”され、さらに都庁で予算化される道程はそう簡単ではなかったわけである。一再ならず、その要望が叶えられない年々が続いたなかで、やや絶望的になった私は、その準備に向けて仲間うちの議論から、一時、遠ざかっていたことがある。

* 東京都立大学名誉教授

その頃であったか、すでに目黒校舎は夏期休暇に入っていたが、人影もまばらなある暑い夏の日、学内で所用をすませた私は、通用門から坂道を下って駅のほうへ帰っていったことがある。その途中で、工学部建築専攻のK教授に出あった。都市研究組織の設立へ向けての定例の会議に出席ということであり、したたる汗を拭いながら、そして当然、同じ会議に出席を要請されていた私をべつとがめるようすもなく、いつもの笑顔で会釈をされ、すれちがっていったその後姿が心の底に焼きついて離れなかった。たいしたこともせず、そうした準備に向けての戦列から脱落していた私が、深い“衝撃”を受けることで、再び、その会議に出るようになったことはいうまでもない。

こうした学内の都市研究の集まりは、自由な発想と異なる専攻分野の交流ともあわせて、私にとってはさまざまなエピソードで綴られた“人生の学校”であったともいえよう。それらの多くはいま、もやのなかに沈み、書かれない都市研の歴史の一コマとして、もはや語られることもない。

そうしたなかで、ほぼ16年まえに都市研究センターとして、ようやく制度化されて組織が確立したときには、わがことのように嬉しかったが、柄にもなく“所長”などという役職を引き受けざるを得なくなるとは思ってもみなかった。

四年間の在任期間にちょうど、大学移転を迎えたなかで、本センターの将来構想をめぐって、いくつもの考えが浮かんで消えた。独立棟の希望や資料室の設置を提案された記憶もあるし、開かれた組織として全国都市研究組織のジョイント・センターを夢みたこともあった。こうした多くの課題をなお積み残しながらも、本センターは、ある学外者のことばを借りれば、確実に都市研究の“メッカ”になりつつある。

人生の過半の歳月を本学で過ごしたわが身にとって、多くの諸先輩やすぐれた後輩によって、蒔かれた「一粒の麦」が育っていくのを見守ることができるのは、研究者の冥利につきるということであろう。